The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	心理相談機関における箱庭療法の砂の利用状況に関する調査研究 ： 砂の性質とその選択の意図や狙いに着目して
Author(s)	二宮, 幸大; 原口, 喜充; 平野, 仁弥 他
Citation	大阪大学教育学年報. 2019, 24, p. 69-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

心理相談機関における箱庭療法の砂の利用状況に関する調査研究
―砂の性質とその選択の意図や狙いに着目して―

二宮幸大　原口喜充　平野仁弥　土岐慧子

＜要旨＞

箱庭療法において砂は中心的な道具立てだが，事例研究や実験研究の中で，実際にどのような砂がどのように使い分けられているかといったことは必ずしも明確でない。これは箱庭に関して得られた知恵や知見の適用範囲を狭めてしまう恐れがある。そこで本研究では，①箱庭療法において用いられている砂に関するデータの蓄積，②砂に対する心理臨床家の態度や現実的制約の把握のために，21名の心理臨床家に質問紙調査を行った。その結果，購入した砂が10，自然から採取した砂が6，入手経路の不明が6あった。砂の選択には，経済的理由，衛生的理由，簡便さなどの影響が大きい一方，心理臨床家は触り心地のよい砂を求めていた。“サラサラ”で，情緒的な温もりを想起させる質感が，“自然”と感じられる砂の特徴である可能性が示唆された。砂に対する心理臨床家の体験や態度，期待は，砂の選択や，クライエントの砂の使い方や表現の幅などに違いを生む可能性が示唆された。そこから，こうした技法以前の領域を意識して箱庭療法を行うことが重要であり，研究においても，どのような砂であるか，その砂を心理臨床家や研究者がどのように捉えているかを加味する必要があると述べた。

Ⅰ．問題と目的

箱庭療法とは小児科医Lowenfeld，M.が考案したWeltspiel（世界遊戯）或いはThe World Technique（世界技法）をKalff, D.M.がSandspiel（砂遊び療法）として発展させた心理療法である（Kalff 訳書，1972）。Ryce-Menuhin（訳書，2003）によれば，「アイテムを使うかどうかにかかわらず，セラピスト[(1)]の眼前で枠づけられた空間（砂箱そのもの）の内において行われる砂との創造的活動」（16頁）がその基本要素であることは世界技法の時代から変わることはない。それゆえ，箱庭療法において砂は中心的な道具立てであると言える。それでは，箱庭の砂は実際どのように選ばれ，用いられているのだろうか。

箱庭療法を日本に導入した河合（1969）によれば，Lowenfeldは，茶色の粗い砂と，細かい砂，および白い砂の3種を，Kalffは茶と白の2種を用意し，河合自身は灰色の1種類のみを用意したという。また実際には，砂の種類が多様であること，山などが作れるよう砂が適度に湿っていること，水が使えることなどが，クライエントの表現の幅を広げる一方で，現実に生じてくる制限との兼ね合いがあることが述べられている。このように，用いられる砂は特に統一されておらず，心理臨床家ごとの裁量に基づいた自由な判断が，臨床の幅を広げるものとして尊重されてきたと言える。ただ，実際にそうした砂がどのように使い分けられているのかなどは，あまり明確にされていない。

砂の治療的性質に関しては，経験的に様々なことが指摘されている。まず，木村（1985）は，アイテムを使わず砂と戯れるうちに少しずつクライエントが語りだすこともあることに触れて「砂はそれ自体，治療的な素材である」（21頁）と述べており，砂に触れることが心の防衛を解き，リラックスさせ，適度な治療的

退行を促し，内面の深い世界の表現を助けると指摘している。砂の感触が退行をもたらすことは母性とも関連してしばしば指摘されており，「砂を使って作業することは，あたかもそれが母なる大地のように，両親が育んでくれるという信頼感についての初期体験の含みを持っている」（Ryce-Menuhin 訳書 2003，25頁）と言われている。また，砂が与える身体感覚の治療的意義も注目されており，砂が身体感覚を介してクライエントに主体感覚をもたらすというRyce-Menuhin（訳書 2003）の指摘，砂が触覚を通して人間に本来備わる動物的・本能的な感覚機能に働きかけ，その感触のよさが心と体を統合する作用を持つという岡田（1984，1993）の指摘がある。さらに，砂の可塑性，砂のなす自然な動きも重要な側面である。木村（1985）は，埋める，掘り下げる，積みあげるといった様々な使い方を可能にする砂の可塑性に着目し「そうした表現は，死と再生，流れなどのテーマとの関連で治療のプロセス上重要な役割を果たすことがある」（21頁）と述べている。中道（2010）も，微妙な動きをなす砂の可塑性が心の襞を表わすことを可能にし，意のままにならぬ砂の流動性にじっくりと対峙することが創造性を引き出すと考察している。これらの指摘は，それぞれの心理臨床家の臨床経験に基づいてなされており，臨床感覚的に頷けるものではある。しかし，彼らが実際どのような砂を用いていたのかはあまり明確ではないため，こうした経験的な知恵がどのような砂に対しても適用可能であるとは必ずしも言いにくい。

また，実験研究としては，母性性と砂の利用との関連を見た山口（1997），砂に触れることによる心理的変化を検討した山口（2005）や城倉（2010），砂の色の違いによる印象の比較を行った山崎・岡本（2015），また，身体感覚について着目した三木（1991），片畑（2003，2006）の質的研究などによって，砂の治療的性質や砂に触れることの治療的意義について，興味深い知見が蓄積されている。その一方で，どのような砂が用いられたのかについての具体的な記述は少なく，クライエントと治療者の関係性の観点から箱庭制作過程を検討した中道（2010）や「自然の砂」の特徴を人工砂との比較から検討した村林（2007）など一部に見られる程度である。得られた知見に関する追試検証可能性や適用可能性の点からも，用いられた砂が明確である方が望ましいと言える。

このように，砂は箱庭療法における，中心的な道具立てとして注目されているにもかかわらず，実際にどのような砂が用いられ，どのように使い分けられているかといったことが必ずしも明確でないことは，箱庭に関して得られた知恵や知見の適用範囲を狭めてしまう恐れがある。研究的な視点だけで言えば，用いる砂を明確にし，統一することが望ましいのかもしれない。しかし，検証可能性を重視するあまり，特定の砂を統一的に用いることは，臨床における各心理臨床家の意図や狙いなどを反映した砂の用いられ方を狭めることになりかねない。臨床的に必要な心理臨床家の裁量の自由度や可能性を殺してしまうことなく，知恵と知見の適用可能性や追試検証可能性を高めるためには，まず，臨床現場で実際にどのような砂が用いられているのか，ということに関するデータの蓄積が重要と考えられる。そこで本研究では，臨床場面での箱庭療法において，どのような砂が用いられているのかを明らかにすることを第一の目的とし，質問紙調査を実施した。ただ，こうしたデータを収集した研究は現時点では見当たらず，本研究はこの領域に先鞭をつける性格のものとなるため，第一歩として，比較的小規模の調査とした。その際，砂がどのような条件のもとで利用されているか，どのような理由で選ばれ，使われているかといった事柄には，様々な事情がかかわっていると考えられるが，実際のところ，何が反映されているのだろうか。このような問題意識のもとで今回は，心理臨床家が砂をどのようなものと感じているかといった意識や態度の他，相談機関で利用する上での箱庭や砂に対する現実的な制約・葛藤などといったさまざまな観点から，箱庭の設置状況や導入の目安，現在用いている砂の選択，利用の理由や狙い，その手応えなどについても問うてみた。

Ⅱ．方法

1．調査協力者

縁故法により，心理相談機関に所属する心理臨床家に調査協力を依頼し，回答の得られた21名を対象とした。得られた回答は，回答者である心理臨床家個人の理解や態度を反映したものと見なして分析した。ただ，心理臨床家個人の意図や態度と，所属する相談機関の方針が必ずしも一致しておらず，そこに何らかの葛藤もある可能性が考えられる。それについては，心理臨床家個人がその葛藤とどのように向き合っているかという観点から捉えることとした。

2．調査方法

調査は2018年６月～９月に実施した。質問項目は，①箱庭の設置・利用状況についてと，②砂についての２領域から構成した。具体的な質問内容については，表１に示した。

項目選定にあたっては，箱庭を用いた心理療法経験のある臨床心理士３名と，心理療法経験のある大学院生１名でディスカッションを行い，項目案を作成した。その後，箱庭療法に造詣の深い大学教員（臨床心理士）ともディスカッションを行い，項目を洗練させた。なお，問題と目的の項でもふれたように，砂による造形のしやすさや水の使用によって表現の幅が広がるため，そのようなことが砂の選定の狙いや砂への手応えに関連していると考えられる。そのため，砂に関する基本的な質問項目に加えて，「高い山を作れるか」「水を入れるとトンネルを作れるか」など造形や水の使用に関する項目も追加した。

上記の質問紙をE-mailあるいは郵送にて配布し，記入の上，返信を求めた。

表１．質問項目

１．箱庭の設置・利用状況について	①面接室の部屋数と箱庭の総数 ②箱庭は一つの面接室に複数あるか／複数の場合の使い分け方（自由記述） ③箱庭のある面接室は、子供向けプレイルームか、成人も使う部屋か、両方か ④心理面接でセラピストが箱庭を導入する積極性の程度 ⑤セラピストはどのようなケースで箱庭を導入するか、クライエントの年齢、属性や特徴について（自由記述）
２．現在用いている砂について	①砂はどのようなものか・砂の入手方法と選択理由（自由記述） ②砂で20cm以上の高い山を作れるか ③砂に水を入れるとトンネルを作れるか ④砂に水を加えた場合の乾燥にかかる時間 ⑤セラピスト自身が砂を触ってみて心地よいと感じるか ⑥砂はどのような手触りか（自由記述） ⑦担当のクライエントが砂を直接手で触り味わう頻度 ⑧担当のクライエントが箱庭に水を入れようとする、入れたいという頻度 ⑨担当のクライエントが砂でトンネルを作ろうとする、作りたいという頻度 ⑩担当のクライエントが20cm以上の砂の山を作ろうとする、作りたいという頻度 ⑪砂への満足度 ⑫砂への満足／不満足に対する理由（自由記述） ⑬⑪で「不満」「やや不満」と答えた場合、どのような砂を利用したいか（自由記述） ⑬箱庭を利用する中で、砂について思うこと、感じること、手応え（自由記述）

3．倫理的配慮

本研究は，大阪大学大学院人間科学研究科教育学系研究倫理委員会の承認を経て実施された。調査にあたっては，研究の概要，研究協力の中断や辞退の自由，データは研究目的でのみ使用すること，公表の際は

個人や機関が特定されないよう細心の注意を払うことを書面にて説明した上で，調査協力者の自由意思のもと研究協力の同意を得た。

Ⅲ．結果と考察

以下，調査協力者の記述の引用を“　”で示す。

1．調査協力者の所属の内訳について

内訳は，病院勤務７名，私設相談室勤務４名，その他10名（うち大学学生相談室３名，児童養護施設２名，学校２名，公的機関２名，教育相談センター１名）であった。

表２．調査協力者の所属の内訳

病院	7
私設相談室	4
大学学生相談室	3
児童養護施設	2
学校	2
公的機関	2
教育相談センター	1
計	21

2－1．箱庭の設置・利用状況について

相談機関が所有する面接室は１～10部屋（平均3.09, 標準偏差2.71）あり，そのうち52.3％の部屋に箱庭が設置されていた。

同一機関で所有している箱庭の総数は１～12（平均2.38，標準偏差2.38）であり，同一の面接室に複数の箱庭を置いていると回答したのは７名であった。同一の面接室に複数の箱庭を置いている場合の使い分け方としては，“家族で来たときはみんなに同時に作ってもらう”，“母子並行の時に”，“セラピストと並行で行う”など，複数人で同時に箱庭を作成する場合や，“台の高さが違うので，クライエントの身長に合わせて”，“砂の質が違うので，その時のクライエントの好みで選んでもらう”，“２箱使うクライエントに対応”のように，様々なクライエントのより多様な表現への対応を狙った場合，さらには“一つ使えない場合（濡らして乾かないなど）のため”のように，箱庭の利用条件を一定にしようとする場合，が見られた。

子供向けプレイルームのみに設置していると回答したのは５名で，全て相談の対象が子どものみの機関に所属していた。成人も使う面接室に設置していると回答したのは８名，両方の面接室に設置していると回答したのは６名，回答なしが２名であった。

心理臨床家（調査協力者）が箱庭を積極的に導入するかについては,「積極的」２名,「やや積極的」９名,「どちらでもない」７名,「やや消極的」２名,「消極的」０名で，これらとは別に，“最初に全員に作らせる”という記述が１名あった。

箱庭を用いる対象年齢は，小学生～中学生，高校生，大学生，成人と幅広く，男女問わず導入されていた。

2－2．箱庭を用いるケースの特徴や導入の目安について

箱庭を用いるケースの特徴や目安については，未記入が１名あり，ほかの20名からは何らかの回答が得られた。“最初は全員に作らせる”が１名，殆ど全てのケースで用いるのは２名で，そのうち“ある程度関係が深まって来た時点で”と何らかの基準を設けていることが窺える記述が１名あった。より具体的な記述としては，箱庭導入の目安は，“こちらが促して関心を示した場合”，“プレイセラピーで遊びが決められない時に勧めてみる”のようにクライエントの動きのきっかけ作りに利用していると考えられるものが２名,“クライエントが関心を示した場合”，“クライエントがやりたいと言った場合”のようにクライエントの関心や自発性を重視したものが６名あった他，言語表現が苦手と思われる場合に用いるとしたものが11名と半数を占めていた。言語表現が“乏しい”，“苦手で子どもっぽい”，“生じにくい”，“喋りすぎてしまうことも含めて言語化が苦手”，或いは“言葉だけでは問題をつかみにくい”，“内容が深まらない”，“語りがなかなか展

開しにくい”など，言語的なアプローチでは関わりが難しいという感触を心理臨床家が抱き，その状況を打開する手段として箱庭を導入する傾向が窺えた。一方，“小中学生は不安を言葉で説明できる子は少ないので，非言語的なものとして”，“言葉で上手く表現できずにクライエントが『してみたい』との思いを持った場合”など，クライエントの年齢や言語能力を考慮したものや，“言語での表現よりも他の表現があっていそうな場合”，“イメージを用いて話される場合”のように表現したいものを表現する適切なチャンネルとして選択しているものもあった。

よりクライエントの特性に導入の目安が置かれていると思われるものとしては，以下の３点が窺われた。①“内向的な子”，“青年期後期によくあるアイデンティティ確立や自らの内面について悩みを話される場合”，“内的葛藤が症状に関わっていると思われる場合”のように，外的な問題状況よりもむしろ内的な状態に意識が向きやすい，または向ける必要があるクライエントに対して利用する場合。②“不登校”，“身体症状を訴える人”，“症状を持っているが，心当たりのない意識化していないクライエント”のように抱えている外的・身体的問題と自身の心の状態の結びつきが意識に上りにくい，または上っていないことが多いクライエントに対して利用する場合があった。さらには，③“あまり行動を伴わない思考に偏った問題解決をする人”，“言語表現（特に情緒的側面）が苦手な人”，“防衛が強そうな場合”など，具体的な行動や情緒との隔たりが大きいと思われるケースに導入する傾向が見られた。一方，“コンスタントにおいてもらうのは分裂病親和型[(2)]のクライエントで，境界例や自己愛の問題を抱えたクライエントに置いてもらうのはなかなか難しいと感じている”という記述からは反対に，情緒が圧倒的なものとして体験されやすいケースでは導入しにくいという感触を持つ心理臨床家がいることが窺えた。

3－1．現在用いられている砂の入手方法･選択理由や目的について

現在用いている砂の入手方法については（複数回答可），不明なものが６名，業者から購入が10名，自然から取ってきたものが６名であった。そのうち複数回答があった１名は，自然から取ってきたものと業者から購入したものを利用していた。業者から購入した砂の種類としては，白い砂の他，黄色，緑，青などの色のついた砂が１名，水を入れなくても固まる砂が３名あった。なお，業者から購入した９名が同一の箱庭の販売業者名を挙げていた他，業者名を特定していない回答が２名，ホームセンターでの購入が１名あった（複数回答を含む）[(3)]。

砂の選択理由や目的については，“特になし”，“業者から購入したらそれだった”，“不明”，“元々あったため不明”，“前任者が取ってきた”など砂の選択に回答した心理臨床家の意図や狙いが特に介在していないと思われる回答が13名あった。一方で何らかの理由・目的があると窺える回答は９名あった。砂の種類・入手経路から砂の選択理由･目的を見ると，大きく３つに分類できた。箱庭の販売業者から購入した場合，“一番安い”，“（相談機関の）性質上，おもちゃ等を買える金額が限られている”などの経済面，“確実”，“手間が省ける・衛生的”といった導入・利用の容易さ，“色々な色・感触がある方が選択肢が広がる（箱庭販売業者の色々な砂と都市型ホームセンターで購入した固まる砂）”のような視覚的・触覚的な多様さが，選択理由・目的として挙げられた。特に，水を入れなくても固まるように加工された砂を購入・利用している場合には，“患児に用いることを想定していたので安全性・感染予防に特化した砂を選んだ”という衛生的配慮や，“（箱庭販売の）業者に注文したらそれだった”という理由もあった。一方で，自然の砂を利用している場合，“手触り第一”，“柔らかさ・細かさ”のように砂に触れたときの自然の砂の質感・感触を重視していると思われる他，“大学院で勉強中に教授から勧められた”，“知り合いの箱庭の先生から紹介されて気に入った”というように先達の経験の影響が窺える回答があった。

3－2．現在用いられている砂の特性や触り心地について

20cm以上の高い山を作ることができるかという質問には，「はい」11名，「いいえ」４名，「分からない」６名であった。砂に水を入れて固めると，トンネルを掘れるようになるかについては，「はい」11名，「いいえ」２名，「分からない」８名であった。砂に水を加えた後，乾燥して元の状態に戻るのにかかる時間については，「数時間」１名，「１日」１名，「２日」１名，「３日以上」６名，「分からない」10名であり，その他具体的に“湿り具合による”，“水を混ぜないようにとの注意書きがあった”と記入されているものがあった。

表３．砂による表現の可能性

	山を作れる	トンネルを作れる
はい	11	11
いいえ	4	2
分からない	6	8

表４．砂の乾燥にかかる時間

数時間	1
１日	1
２日以上	1
３日以上	6
分からない	10
その他	2

これらの砂の性質については，本研究への協力に当たって，改めて利用している砂の性質を調べた心理臨床家とそうではない心理臨床家がいる可能性がある。そのため，断定的なことは言えないが，「分からない」という回答は，心理臨床家が普段，砂による造形を主とした表現や砂に水を入れた表現を目にする機会や経験が少ない可能性を示唆している。

実際に，クライエントが箱庭に水を入れようとする，または，入れたいという場面に出くわす頻度は，「頻繁にある」１名，「時々ある」３名，「ごく稀にある」４名，「全くない」13名であった。クライエントが箱庭で砂のトンネルを作ろうとする，または，作りたいという場面に出くわす頻度は，「頻繁にある」０名，「時々ある」４名，「ごく稀にある」２名，「全くない」15名であった。クライエントが箱庭で20cm以上の高い砂の山を作ろうとする，または，作りたいという場面に出くわす頻度は，「頻繁にある」０名，「時々ある」２名，「ごく稀にある」６名，「全くない」13名であった。クライエントが砂を直接手で触ることを味わう場面に出くわす頻度は，「頻繁にある」６名，「時々ある」10名，「ごく稀にある」１名，「全くない」４名であった。

表５．クライエントの希望や実際の振る舞い

	水を入れる	トンネルを作る	山を作る	砂の触感を味わう
頻繁にある	1	0	0	6
時々ある	3	4	2	10
ごく稀にある	4	2	6	1
全くない	13	15	13	4

回答した心理臨床家自身が砂を触ってみて心地よいと感じるかについては，「心地よい」11名，「やや心地よい」５名，「どちらでもない」３名，「やや不快」１名，「不快」１名であった。「やや不快」な砂の手触りは“ざらざらしていて，手にひっつく，固い”で，「不快」な砂の手触りは“不自然，やや硬め，しっとりしている”というものであった。

砂の手触りについては，入手経路や砂の種類が明らかになっているものに限って記述する。箱庭の販売業

者から購入した砂は，“サラサラした，砂浜や砂丘のよう”，“すべすべ，滑らか”（５名）といった触感，“少し冷たい”，“冷たくて気持ち良い”（３名）といった冷感，“重みがある”（１名）といった重量感が特徴として挙げられていた。水を入れなくても固まる砂の手触りは，“じっとりしている”，“不自然，やや硬め，しっとりしている”，“砂の冷たさが気持ち良いが砂独特の匂いはなく，ねっとりしていて砂らしくない。人工的ではある。（衛生的には良いとは思う）”というように，砂として期待している触感や匂いではなく，湿り気や粘り気，硬さ，人工的で不自然に感じられている一方で，心地よい冷感や衛生面は評価されてもいた。自然の砂の手触りは，“サラサラ”，“サラサラしているが，ほんの少し湿り気を帯びている”という触感以外に，自然の砂特有のものとして“柔らかい”（２名），“温かい”（２名）といった情緒的な温もりを想起させる記述や，“砂煙が立ちにくい”，“きめが細かい”といった特徴が挙げられていた。

箱庭の販売業者から購入した砂と自然の砂に共通して，“サラサラしている”が挙げられる一方で，水を入れなくても固まる砂の手触りにはそうした性質よりも“じっとり”，“しっとり”，“ねっとり”といった性質が“不自然”，“砂らしくない”と感じられていたことから，“サラサラしている”は「砂らしさ」を感じさせる性質の一つである可能性が示唆される。また，箱庭の販売業者から購入した砂は冷感や重量感を特徴とするのに対して，自然の砂は情緒的な温もりを想起させる質感が特徴として挙げられていることから，“サラサラ”であり，かつ情緒的な温もりを想起させる質感があることが，“自然”と感じられる砂の特徴と言える可能性が示唆される。

3－3. 現在用いられている砂への満足感

現在用いている砂に対する心理臨床家（調査協力者）の満足度は，「非常に満足」４名，「まぁ満足」８名，「どちらでもない」５名，「やや不満」２名，「不満」２名であった。満足の理由としては，“クライエントが『気持ち良い』とか，『不思議』とか言うので，その人にとって特別な体験になっているのが良い”，“子どもたちはさらさらとした感触をとても気に入っている。箱庭は作らなくても楽しんでいく。ちょうど良いのだと思う”，“触れることで心地よさを感じられる”のように砂の手触りの良さや砂に触れた時の独特の体験が大きな理由であった他，“砂が天然であること，臭い（かすかに海のにおい）もする”といった触感以外の要素の影響もあることが挙げられていた。一方，不満足の理由としては，“予備の箱庭も用意しているが，砂が乾くまでに時間がかかる。また，濡らすと次の人で使えない”，“砂が渇きにくい”など，水を入れた後そのままでは箱庭を一時的に使えなくなることや，“濡らすとちょっと臭い”，“ずっと同じ砂を使い続けているため衛生的に少し汚いのではないかと思う”ように，やや不衛生に感じられることが挙げられていた。また，“手触りが悪く，手にひっつくところ，色も暗い感じで，好きじゃない”，“サラサラしすぎて，ややあらい，崩れやすい感じがする，アイテムを置くと不安定”のように，現在利用している砂の満足の理由にも挙がっていた触感は不満足の理由としても挙げられていた他，色や安定感も重要な要素と感じられていた。特に，固まる砂に関しては，“砂らしくないところ”，“サラサラ感が欲しい”，“砂を触ると，もやもやと変な動きを見せる。それは，腫瘍が増殖してくるイメージをもたらすし，医師は臓器が崩れるようなイメージを持つ動きと評していた”というように，通常の砂に期待される感触や動きとは異なる部分が不満足の理由として挙げられていた。その中には，“造形も大事だとは思いますが，まず触れた時の手触りは重要と思います。不自然な砂はやっぱり心理療法に適さないと思います。家庭の中で使う分にはもちろんいいとは思うのですが。”と，心理療法に用いる場合には，自然な砂の感触が重要であると感じている心理臨床家もいた。

現在利用している砂に対して，「不満」，「やや不満」と答えた場合に利用したい砂としては，“すぐに乾く砂。箱庭を２つ置きたい”，“乾きやすいもの。大量に入手できる（替えがきくもの）”というように，水を

入れた後でも，すぐに箱庭を使用することを可能にする砂や，“べとべとしない物。水を入れてもにおいがしないもの”，“さらさらしていて，触り心地の良い砂”，“少し湿り気があり，細かい粒の砂”など，利用する際の臭いや感触，崩壊感などの不快感が少ない，或いはより心地よい，安定感のある砂の他，“普通の，シンプルな，自然の砂。加工されていない砂”，“自然の砂，あるいはそれに限りなく近い砂”のように，特殊な加工のなされていない砂が求められていた。

4. 心理臨床家が箱庭の砂について思うこと，感じること，手ごたえ

箱庭を利用している中での，「砂について思うこと，感じること，手応えなど」に関する自由記述では，“クライエントが触った時に『この砂気持ちがいいね』と口にされることが時々あるので，言語面接では味わえない心地よさを味わう体験になるのではと思う。”，“砂を触りながら，いつもと違う話をしてくれるクライエントがたまにいて，面白いなぁと思います。”，“砂を触っているだけでも癒される子どもがいる。”というように，砂に触れることを通して，クライエントの振る舞いや様子が変化することが観察されていた。また，“箱庭の導入時，フィギュアを手に取る人と，砂を触ってみる人に分かれると思います。その際，砂の触り心地は，箱庭を作ってみたいという気になるかどうかという点においても重要な気がしています。”，“砂に直接，触れることが出来る方は，気持ちよい，癒されると話されます。勧めても，触れない方，ハケで触られる方もいます。２回目以降，触れる方もいます。”というように，砂に直接触るクライエント，道具を挟んで砂に触るクライエント，砂に触れないクライエントがいることが明らかになった。その際の砂の触り心地の良さは，クライエントが箱庭を製作する上で促進的に働くと期待している心理臨床家がいることも窺えた。心理臨床家自身の体験の記述もあり，“私も仕事に疲れたら触って癒されます。”，“手で砂に触ることで，退行できる，なつかしさがいつも心にしっとりしたものをもたらしている。”などのように，砂に触れることで，疲れが癒されたり，懐かしさやしっとりとした感覚を得られたりするということを体験している心理臨床家もいることが窺えた。こうした心理臨床家自身の砂に触る体験の有無やありようが，先述のような，クライエントの砂に触る体験についての期待や考えの前提となっている可能性が考えられる。

このように，砂がクライエントの振る舞いに与える影響は決して小さくないと考えられ，砂の触り心地を重視している心理臨床家もいる一方で，“どうしてもアイテムの方に注意が向かいがち”で，“普段あまり砂自体について考えたことがなかった。”という記述や，“これまであまり箱庭を用いていても砂という視点でとらえたことはありませんでした”という記述からは，心理臨床家によっては，普段砂はあまり注目されていない場合もあることが窺えた。こうした砂への注目の少なさが一つの背景要因となって，3−1で見たように，既にあった砂をそのまま用いたり，新たに購入する際も以前のものを踏襲したりすることや，砂の選択に対する心理臨床家の意図やねらいの介在がやや弱くなることが生じる可能性も考えられなくもない。しかし，この点は今後更なる検討を要する。

また，“水をもっと積極的に使ってもらうにはどうしたら良いのかと考えている。こちらの構えもあって（砂箱が１台しかないので少し躊躇してしまう）か，なかなかダイナミックな形では使われない。使われるとしても，申し訳なさげにほんの少し砂を湿らせる程度である。”，“湿った砂も用意していたが，年を取ってその余力がなくなった。砂が湿っていれば山を作る人もいるはずだ。”，“砂こぼしたら掃除が大変だし，濡らしたら乾かすのも大変だしで，実際の業務の中で箱庭を行うには結構覚悟がいるものだと感じています。”という記述もあった。箱庭に水を入れることについては，次に箱庭を使用するために砂を乾かしたり，入れ替えたりする必要が生じるため，心理臨床家にとってかなりのエネルギーを要すると感じられていることが窺えた。

Ⅳ．総合考察

ここまでで，箱庭療法において用いられている砂の性質と，砂に対する心理臨床家の態度について，質問紙調査の結果を整理，検討してきた。そこから，砂の選択理由・目的と砂の性質を心理臨床家がどのように把握しているか，用いている砂を心理臨床家がどのように感じているかといった，砂に対する心理臨床家の体験や態度，期待に応じて，選択される砂に違いが生じる可能性と，砂の使い方や表現の幅，砂の果たす役割などに違いが出てくる可能性が示唆された。以下，このことについて総合的な考察を加えるが，まず，砂に対する心理臨床家の体験や態度，期待について触れ，その後でそれらが砂の選択や使い方などに及ぼす影響について述べる。

砂に対する心理臨床家の態度やあり方を支えるものとしては，①一般に箱庭の砂で可能な表現をどれくらい知っているのかという知識(調査では,箱庭に水を入れるということを初めて知ったという記述もあった)，②自身が用いている箱庭の砂で可能な表現や，クライエントがどのような表現をすることがあるのかをどれくらい把握しているかという経験（結果と考察3-2)，③クライエントの体験だけでなく，心理臨床家自身も箱庭の砂に触れて，どのようなものを感じたことがあるかという体験（結果と考察3－3，４），といったことが挙げられる。こうしたことから，心理療法中に今ある箱庭の砂でどのような体験ができて，どのような事柄が起こりうるのか，どのようなことに留意すべきかといった，箱庭の砂に対する心理臨床家の態度が形成されてくると考えられる。こうした態度は，次に述べるようなクライエントの見立てと絡み合いながら，そのアプローチの選択にも大きく影響するだろう。

箱庭を心理面接に導入する際の見立てに関しては，結果と考察2-2で見たように，多くの場合で言語化の問題が関わっていた。言語化の問題と言っても，そこには，年齢や知的能力のために自身の感じているものを言葉にすることが苦手な人だけでなく，感じていることを言葉にすることに不安や抵抗感を覚える人，知性的或いは観念的な領域でのやり取りで留まってしまう人もいれば，本人は意識していないこころの領域で動いているものがあると思われる人や，そもそも言葉では表現にくいものを感じている人など，実に様々な場合があった。そうしたクライエントに対して心理臨床家は，言葉を主としたやり取りでは十分な効果が得られにくい，或いはより積極的に，身体感覚や，それに伴う情動，イメージにアプローチする方が良いという見立てをもって箱庭療法を導入するのだと考えられる。

次に，箱庭療法の導入において留意すべきことや，心理臨床家が箱庭の砂に期待していることについて述べる。ただ，両者には密接な関連があるため，明確に分けて記述することが難しい。まず留意点としては，まだ何も置かれていない状態の箱庭の砂は，クライエントにとっては，真っ白いキャンバスのように，何でも表現できる期待や安心感と同時に，内面を引き出されたり，探られ，見られたりする不安や恐れをもたらす可能性がある。それは，箱庭の砂の広がりが,「表出を保護すると同時に強いるという二重性」（中井1974，195頁）を持つ枠によって囲まれた「自由な保護された空間」（Kalff 訳書 1972，ⅳ頁）であり，砂がもたらす身体感覚や情動，イメージは，その空間への入り口としてクライエントを迎えるものとなると考えられるからである。そのため，箱庭療法に用いられる砂が，安心感や安定感，懐かしさといった心地よい感覚を生じさせるのか，それとも“べとべと”“ねっとり”“汚い”といった不快な感覚を生じさせるのかということは非常に重要なのだろう。結果と考察3－2や3－3及び４で示した，心理臨床家が砂に感じる快不快や満足度，自身の砂の体験についての記述は，こうした事柄を心理臨床家が体感的に把握していることを反映していると思われる。また，今回の調査結果からは，触り心地や崩壊感によっては砂が不快感をもたらす素材として体験される心配を抱く心理臨床家がいることや，砂に安定感も求められていることが明らかになっ

た。それは例えば，“砂を触ると，もやもやと変な動きを見せる。それは，腫瘍が増殖してくるイメージをもたらすし，医師は臓器が崩れるようなイメージを持つ動きと評していた”という記述や，“サラサラしすぎて，ややあらい，崩れやすい感じがする，アイテムを置くと不安定”という記述から窺える。砂に触れることについては，砂に触れる気持ち良さを述べたり，砂に触れていることで癒されたりするなど，砂に触れることを通して，クライエントの振る舞いや様子が変化することや，心理臨床家自身も砂に触れることで心地よい体験をしていることなどが報告された。砂に触れる際に期待される安心感や安定感，心地よさは，Kalff（訳書 1972）が重要視した母子一体性と関連していると思われる。Kalffの言う母子一体性は，主に箱庭を制作する際のクライエントと心理臨床家の関係についてのものではある。しかし，木村（1985）が，砂に触れることが適度な治療的退行をもたらすと述べている他，岡田（1984）やRyce-Menuhin（訳書 2003）も砂に触れることと母性的なものとの繋がりを指摘していることから，砂に触れることで体験が期待される事柄に，母子一体性との繋がりを読み取っても良いだろう。また，河合（1969）は，「砂に全然手を触れないことは，気乗りしないこと，自我の弱さ，無意識的なものに対する怖れ等を示すが，治療の進行と共に段々と砂に触れるようになることが多い」（50頁）と述べており，砂に触れること自体が臨床上肯定的な動きである。“砂の触り心地は，箱庭を作ってみたいという気になるかどうかという点においても重要な気がしています”という記述もあったことから，砂の触り心地の良さは，クライエントに安心感や安定感をもたらし，砂に触れようとする動きの促進要因になる可能性が考えられる。中道（2010）は，「砂の崩壊感に耐え，自分にぴったりと来る砂の造形を行えるだけのエネルギーが製作者に得られた時に，砂と正面から対峙した表現が行えるのではないか」（41頁）と述べており，砂の崩れる感じは必ずしも否定的な作用をもたらすわけではないが，砂の感触がもたらす温かさや心地よさ，安心感や安定感は重要な要素として期待されていると言えるだろう。

このような心理臨床家の態度や期待は，クライエントの見立てやアプローチ，その際の留意点などとも関連しながら，さらに，選択される砂やその砂の使われ方や表現の幅，砂の果たす役割などにも影響を与えると考えられる。砂の選択に関しては，結果と考察3－1から，経済的問題や衛生的配慮，導入の簡便さなどの所属機関の事情や現実的制約と，手触りや視覚的・触覚的な多様性を重視する臨床家個人の態度や意図の間の葛藤もあり，外的な要因が優越しているのではないかと推察される。しかし，そうした状況にあっても，現在利用している砂に対して心理臨床家が心地よい感覚や，安心感，安定感といったものを体験している場合や，先述の砂に関する知識や経験をある程度有している場合には，それらが治療的イメージとして心理臨床家を支え，砂の選択に対して，心理臨床家自身の意図やねらいといったものが介在しやすくなるかもしれない。そこには，先達の知識や経験の影響もあると考えられる。

砂の使われ方や表現の幅，砂の果たす役割については，クライエントが砂にどのように関わるかという要因もある。しかし，それに加えて，心理臨床家がどのような箱庭の砂の表現可能性を知っているか，自身が用いている砂の利用可能性や限界についてどのような経験や体験を持っているかということも，その幅を広げたり狭めたりする要因として働くはずである。例えば，箱庭の砂をあまりにも散らかすことは，クライエントの衝動性に歯止めが効かなくなることや，多量の砂を片づけるセラピストとの関係や面接自体に悪影響を及ぼすことがある。また，箱庭に溢れるほどの水を入れると，砂や水がこぼれ，クライエントの心的内容の氾濫や崩壊感に繋がるおそれもある。その一方で，砂をまき散らすことや大量の水を入れて砂が崩れることなどが，クライエントにとって重要な表現となることもある（例えば波多江，2007）。今回の調査で得られたデータに即して言えば，結果と考察3－2で示したように，現在用いている砂で高い山やトンネルを作ることが出来るかどうかといった事柄について「分からない」と回答した心理臨床家が一定数いたことと，心

理臨床家が普段，砂による造形を主とした表現や砂に水を入れた表現を目にする機会や経験が少ない可能性は無関係ではないだろう。また，“箱庭の砂に水を入れるということを初めて知り，これまで他の方が箱庭を用いていても水を使っている方が職場にはいなかったので，新しい視点をいただいた”という記述からは，表現可能性についての知識の有無が，その幅に影響していることが示唆される。また，結果と考察４の最後に取り上げた記述のように，砂の乾燥や掃除にかかる時間や箱庭の台数などの設定上の限界や，箱庭の設定を維持する心理臨床家自身の限界といったことから生じる躊躇いや負担感もクライエントの表現可能性に影響を及ぼすことも示唆される。心理臨床家は，制限時間のあるセッションの中で，自由であると同時に保護された空間を整えつつ，今この関係の中で，どこまでこのクライエントの表現を許容するのかということが問われる。それゆえ，こうした砂の可能性や限界について，どの程度までであれば，そうした危険からクライエントの安全を守れるか，自身も心理的，体力的に持ちこたえられるかといったことを心理臨床家が知識や自身の経験，体験として知っているかどうかということは非常に重要である。それらは，箱庭に取り組むクライエントを見守る心理臨床家の態度やあり方に，許容的，制限的，あるいは躊躇いを含んだニュアンスとして現われ，箱庭の砂がクライエントにとって，生き生きとした表現や体験をする場になりうるかということに関わってくると考えられる。

以上のことから，箱庭療法において用いられている砂や，それに対する心理臨床家の体験や態度，期待は，Kalffの言う自由な保護された空間という場を整え，クライエントの表現や振る舞いの可能性に影響を与えるのではないかと考えられる。そのため，臨床においては，こうした技法以前の領域を意識しながら，箱庭を導入することが重要であると言える。また，事例研究，実験研究のどちらにおいても，箱庭の砂について論じるときには，その砂がどのような砂であるのか，その砂を心理臨床家或いは研究者がどのように捉えているのか，ということを前提条件として加味して研究を進める必要があるだろう。

Ⅴ．研究のまとめと今後の展望

本研究では，次の目的で比較的小規模の質問紙調査を行った。すなわち，①箱庭療法で用いられる砂について，臨床上必要な自由度と，臨床や研究を通して得られた知恵や知見の適用可能性，追試検証可能性を両立させるために必要な，臨床場面において用いられている砂に関するデータの蓄積と，②砂に対する心理臨床家の態度や現実的制約の把握である。その結果から，砂に対する心理臨床家の体験や態度，期待は，クライエントの見立てやアプローチなどとも関連しながら，どのような砂が選択されるかということや，クライエントの砂の使い方や表現の幅，砂の果たす役割などに違いを生む可能性が示唆された。そこから，事例研究，実験研究のどちらにおいても，箱庭の砂について論じるときには，その砂がどのような砂であるのか，その砂を心理臨床家或いは研究者がどのように捉えているのか，ということを前提条件として加味して研究を進める必要があると述べた。

各論的には，次の事柄も示唆された。①砂の入手・選択には，心理臨床家の意図やねらい以外に，経済的理由や導入の簡便さ，衛生面への配慮などの現実的な要因も影響を及ぼしうること。②多くの心理臨床家の抱く印象としては，砂の触り心地や感触，色や安定感が重要な要素であること。③“サラサラ”であり，かつ情緒的な温もりを想起させる質感があることが，「自然」と感じられる砂の特徴と考えうること。④心理臨床家自身の砂に触る体験の有無やありようが，先述のような，クライエントの砂に触る体験についての期待や考えの前提となっている可能性。⑤砂がクライエントに与える影響は小さくなく，砂の触り心地を重視する心理臨床家もいる一方で，砂が普段あまり注目されていない場合もあること。⑥箱庭療法においては，

温かさや心地よさ，安心感や安定感をもたらす感触の砂が期待されていると考えられること，などである。

本研究の限界としては，推測統計ができるほどの規模の調査ではなかったため，砂の手触りの快不快と箱庭導入の積極性などの関連を統計的に明らかにすることはできていない。そのため，より大規模な質問紙調査を実施し，そうした関連を明らかにすることが期待される。しかし，砂に対する心理臨床家のねらいや想い，さらには砂の選択・利用に関する心理臨床家の積極性あるいは消極性といった意識のあり方，それに対して現実的な制約の影響があることなどを，ある程度示すことができた。

また，質問紙への回答に際して，改めて砂の性質や入手方法などを調べた人とそうでない人の両方がいる可能性がある。そのため，箱庭に対する心理臨床家の普段の意識を十分に捉えられているかについては，疑問の余地が残る。ただ，普段から砂やアイテムについて考えている程度については，心理臨床家ごとの差があり，本研究への協力によって，自身の所属する機関にある箱庭や砂のルーツを知る機会となったことも窺える結果が得られた。心理臨床家の意識は，アイテムや表現されたものの象徴性に向きやすく，それらを支える砂やそれが利用されるに至った経緯・ルーツは，影になりやすい。しかし，そこには本研究でその一端が明らかになったように，心理臨床家の意識のあり方が反映されているはずである。山中（2010）によれば，じっくりと見守る態度の上に立ち，箱庭の解釈に取り組むことはこの箱庭療法の深化に繋がるという認識が共有されてきているが，それに加えて各心理臨床家が，砂や道具に改めて意識を向けることは，本法のより一層の深化に寄与すると考えられる。心理臨床家が新しい機関で箱庭を用いる際に，既に箱庭が設えられていたとしても，それをそのまま踏襲する形で利用するのではなく，アイテムや砂の特性，ルーツなどを自ら調べたり，考えたりすることが，有効な利用に繋がるのではないだろうか。

（注）

（1）以下，引用における「セラピスト」は，本文における心理臨床家と同じ意味で用いる。
（2）現在では，「分裂病」という用語は用いられず，統合失調症と記載されることが通常であるが，ここでは回答者の経験や理解，表現を尊重してそのままの表記とした。
（3）現在，この業者からは，色や手触り，造形のしやすさなどが異なる砂が４種類販売されている。

謝辞

本論文の執筆にあたり，大阪大学大学院人間科学研究科の老松克博教授には，ご多忙な中，貴重なご助言を頂き，大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。また，大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻臨床教育学講座臨床心理学研究分野大学院生の長末直子さんには，質問紙の配布・回収にあたってご協力を頂きました。ありがとうございました。

引用文献

波多江洋介　2007「箱庭で水を用いた遊びを繰り返した男児の遊戯療法過程」『心理臨床学研究』Vol.25, No.2, 228-239頁.
城倉登代子　2010「箱庭療法における砂」『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会・自然科学篇』60, 113-120頁.
片畑真由美　2003「身体感覚がイメージ体験に及ぼす影響―箱庭制作における触覚の観点から」『心理臨床学研究』Vol.21, No.5, 462-470頁.
片畑真由美　2006「臨床イメージ体験における内的感覚についての考察―箱庭制作体験における『身体感覚』の観点から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』52, 240-252頁.
Kalff, D. M.　1966, 河合隼雄監修　大原貢・山中康裕訳『カルフ箱庭療法』誠信書房　1972.
河合隼雄　1969『箱庭療法入門』誠信書房.
木村晴子　1985『箱庭療法―基礎的研究と実践』創元社.

三木アヤ　1991 「象徴とイメージ」 三木アヤ・光元和憲・田中千穂子編 『体験箱庭療法』 山王出版，31-42頁.
村林真夢　2007 「箱庭の砂とリアリティ」 岡田康伸・皆藤　章・田中康裕編 『箱庭療法の事例と展開』 創元社，37-47頁.
中井久夫　1974 「枠づけ法覚書」『中井久夫著作集　精神医学の経験　2巻　治療』 岩崎学術出版社　1985，192-203.
中道泰子　2010 『箱庭療法の心層―内的交流に迫る』 創元社.
岡田康伸　1984 『箱庭療法の基礎』 誠信書房.
岡田康伸　1993 『箱庭療法の展開』 誠信書房.
Ryce-Menuhin, J. 1992，山中康裕監訳　國吉知子・伊藤真理子・奥田　亮訳 『箱庭療法―イギリス・ユング派の事例と解釈』 金剛出版　2003.
田中千穂子　1991 「はじめての箱庭」 三木アヤ・光元和憲・田中千穂子　編 『体験箱庭療法』 山王出版，11-25頁.
山口登代子　1997 「箱庭療法における砂と母性」『性格心理学研究』 Vol.5，No.1，58-60頁.
山口登代子　2005 「箱庭療法において砂を用いることの意味」『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会・自然科学篇』 55，227-234頁.
山中康裕　1991 「砂だけの表現が転機となった箱庭療法の症例」『臨床精神医学』 Vol.20，No.7，1149-1157頁.
山中康裕　2010 「日本箱庭療法学会と国際箱庭療法学会（ISST）の現状」『日本芸術療法学会誌』 Vol.40，No.1，81-83頁.
山崎恵莉菜・岡本祐子　2015 「箱庭の砂の色が箱庭制作に与える影響について」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』14，48-57頁.

A Survey About the Usage of Sand in Sandplay Therapy: Nature of Sand, Intention, and Aim of Choosing Sand

NINOMIYA Koudai, HARAGUCHI Hisami, HIRANO Kimiya, & DOKI Satoko

Abstract

Although sand is the core material in sandplay therapy, the type of sand used is not necessarily defined and has not been distinguished in case studies and experimental research. This problem may narrow the application of the knowledge obtained from such studies. A questionnaire was administered to 21 clinical psychologists, aiming to accumulate data about the sand used in sandplay therapy and to clarify constraints and attitudes of the clinical psychologists towards sand. Ten of the twenty-one participants reported using sand bought from makers, while six use natural sand, and six answered "unknown." While choice of sand is strongly restricted by economical, hygienic, or convenience factors, the clinical psychologists tended to consider sand that is comfortable to touch as most desirable. "Smooth" texture and recalling emotional warmth were suggested as characteristics of "natural" feeling sand. From the results, the experiences, attitudes, and expectations of the clinical psychologists towards sand can impact the type of sand that is chosen, how clients use and play with it, and the type of role sand plays in therapy. It is important to be conscious of these factors prior to using techniques in sandplay therapy. When discussing sand in sandplay therapy in both case studies and experimental research, it is necessary to take into consideration what kind of sand is used and the perception of the psychologist.